

「食の安全・食料危機・希望の有機給食・講演会」（食の危機と解決策）

日時：2月23日（祝）14:00～16:15 場所：伊勢原シティプラザ1F ふれあいホール

講師：印鑰智哉氏（OK シードプロジェクト事務局長）

参加者は、会場約 60 名、Zoom 約 15 名

食に関する多重危機が同時進行している。生物絶滅危機、社会の危機、気候危機の 3 つによる食の危機が健康危機をも引き起こしている。「工業的農業」が気候を破壊、人間の健康も破壊している。特に子どもの健康が危ない。近年、日本での要支援生徒数が急増している。感染症の急増についても、抗生物質の多用（遺伝子組換え飼料・食品、農薬、加工食品）の拡大によって、工業型農業が感染症危機を作り出している。

「フードテック」（細胞培養で食品を作ったり、代用肉や合成生物学を利用した、一般の命でないものを食べる食品産業）が話題になっているが、細胞を遺伝子操作して不死化する（一種のガン細胞にする）技術であり安全なものかどうか。「遺伝子組み換え」は、一部遺伝子を取り、他の生物の遺伝子を入れる技術。（日本では 1999 年から植物油、甘味料、醤油などが表示なしで流通販売されている）。除草剤グリホサートで枯れないものが遺伝子組み換え農産物全体の 7 割で、手間や費用の削減になると言われた。しかし除草剤代で費用がかかり、雑草は除草剤より強くなり、より多くの農薬が必要になり、結局農家にとってはマイナスになった。2015 年で限界となり、遺伝子組換え作物の耕作面積は増えていない。また「ゲノム編集」で引き起こされる品種改良の危険性はどうか。ゲノム編集は、特定遺伝子を破壊し、栄養強化した品種など 3 種類が 2022 年秋からインターネット販売されている。2023 年度、小学校でゲノム編集トマトの栽培を進めようとする計画があり市民団体が反対している。遺伝子の働きはまだ十分に解明されておらず、コントロールできているとはいえない。ゲノム編集は、安全とはいえず、人間の赤ちゃんには使うことが禁止される技術であり、行き詰っている。

では、これからの農業はといえば、有機農業だ。世界でも、インド、アフリカ諸国などで増え、ブラジルでは有機農業の方がお金がかからず収穫でき、貧しい農家が有機農業をし有機農産物を食べている。有機の農業では、日本は 100 位ぐらい。有機農業の方が生産性がある。多様な物を一緒に植えることで地下の微生物が多様になり、生物多様性がひろがる。国でも「みどりの食料戦略」を打ち立て有機農業を勧める計画を出した。

遺伝資源の多様性が大事だ。多様な遺伝資源を守ることが将来の食の安全保障となる。しかし日本で正反対に政府は動いており 1998 年に種苗法を改正し民営化開始、さらに民営化推進のために 2018 年種子法廃止、2022 年種苗法改正と続いている。タネが作れない国、タネが採れない国になり、海外依存が進んでいる。特許による種子しか作れない状況を進めることで種子と農業を支配し、遺伝子組換え企業が種子市場の独占を進めている。

このような中で、学校給食の食材を地場産の有機・自然農法のものに転換することで、家庭が変わり、地域の市場が変わり、地域の農家が支えられることにつながる。オーガニックの無償給食は可能である。参加型民主主義で進めよう。